

子どもたちが育っていく可能性

＜変わっていく時期＞

小学校、中学校の時期は、子どもが変わっていく時期だと言われます。

- 小学校時代あまり目立たなかった子どもが部活動や生徒会で周りを引っ張っていく存在になる。
- 元気いっぱいいつもリーダー的な存在だった子どもが、口数が少なくなり静かな存在になる。
- やんちゃだった子どもが徐々に周囲の信頼を得て、児童会役員として活躍する。 など

もちろん好ましい変化だけではありません。時には心配な方向に進む場合もあります。また、幼い頃のかわいらしいイメージが強いと、子どもたちが生意気になったり無口になったりすると、何となく寂しさを覚えることでしょう。でもわずかな変化でも、それを意味づけることによって、成長を喜び合えるようになるのではないかと思います。いかがでしょう、この1学期はお子さんにどのような変化が見られたでしょうか。毎日接しているとなかなか気づきにくいものですが、子どもたちの育ちを冷静に見て今後の更なる成長を楽しみにしたいと思います。

＜「28人が楽しく、28人の心に残る、28人とかかわる」2日間＞

5年生の登山・自然体験学習は天候が心配されましたが、一度も活動に影響が出ることなく過ごせた2日間でした。そして子どもたちが自分で運営して楽しんだ2日間だったと感じます。「28人が～」という言葉から、「一人残らず28人全員」という意味が伝わってきます。くじけそうになる場面もあったと思いますが、励まし合ったり協力し合ったりして2日間を乗り切りました。

- ・「先生あとどれくらい?」「あ～疲れた」などの声がありながら、前の人に続いて一步一步辛抱強く歩み続け、クラス全員が登頂し、下山した。
- ・きつくなると「頑張って」、転んでしまうと「大丈夫?」など、励まし合う声がかかる。
- ・「右側の木に燃え移らせたいんだ」と言って、工夫しながらうちわであおいでいる。
- ・自分なりのやり方で、実に丁寧に根気よく野菜の皮むきをしている。
- ・タイマーを持ってきて、煮炊きする時間を計りながら火の調節をしている。
- ・残菜が出ないように、ちょうど食べきれる量の食事を工夫している。
- ・調理活動中、やることなくブラブラしている子がいない。
- ・自分の好き嫌いを優先することなく、係の指示に沿ってフォークダンスを楽しんでいる。 など

事前に飯ごう炊さんの体験をしていたとはいえ、当日大きな失敗がなく、夕食、朝食を済ませることができたのはなかなか立派でした。登山中も、前日までの雨で滑りやすくなっており、転倒する児童もいましたが、必ず励ます声がかかります。「28人が～」という目当てが一人一人の児童に浸透していることがうかがえました。

私は子どもたちを見ていて、登山、自然体験学習の準備の間の数週間で、こうした姿が急に出てくるようになったのかな、と考えていました。登山だから頑張る、キャンプだから協力する、そうした気持ちが当然あったことと思いますが、それだけでは、このような姿には直接つながらないように思うのです。子どもたちを見てみると、普段の生活の様子そのままのように見えます。

- ・お互いに励まし合う言葉が飛び交う。
- ・集合時、さっと集まって全員がそろろう。
- ・自分だけでなく、他のみんながどう思うか考えている。
- ・火をつけたり料理を作ったりしている時、分からなかったり迷ったりすると、大人を頼る前に必ず友達同士で相談したり助言し合ったりしている。
- ・子どもたちで計画をしっかりと立ててあり、当日それに沿ってスムーズに進めている。

- ・友達同士の話の中に、相手を否定したり文句を言ったりする「マイナス言葉」がほとんど聞こえない。
- ・地域の方からカヌーの指導を受ける時、耳を傾けて聞いている。
- ・様々な意見が出ると否定するのではなく、耳を傾けたり受け入れようとしたりする余裕がある。
- ・活動がスムーズに進み、予定より30分ほど時間に余裕が生まれている。
- ・指示が出た時に、「はい」という返事が聞こえる。 など



こうした姿がごく自然に2日間の中に見られました。実に自然なのです。どういうことかということ、それが当たり前になっている、つまり普通の学校生活のままなのです。日々の学校生活の延長で2日間を過ごしているように見えるのです。私たちから見れば「すごいな」「素晴らしい5年生だ」ということになるのですが、当の本人たちは「いつもやっていることをいつも通りにやっている」ということなのかもしれません。4月から全校をリードしてくれている6年生がそうであったように、日々の学校生活一つ一つを確実にやり遂げていく中で、自分たちの手で行事をやり遂げるという意識がどんどん広がっているように思います。これからの5年生の成長を楽しみにしています。

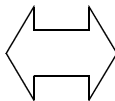


<気づきや考えを基に、真剣な話し合いへ>

1年生は、児童が捕まえてきたトンボをめぐって様々な意見が飛び交い、これからどうするのかを真剣に話し合いました。ヤゴから出てきたばかりのトンボのようです。話し合いは「トンボを逃がしたくない」「トンボを逃がしたい」の2つの意見に分かれます。考えが拮抗する場面です。一人一人の児童が自分のこととして事象をとらえ、まさに真剣に話し合っています。子どもたちは全員が自分の意見をもって発言しています。そして、友だちの意見に拍手が出たり、「でも～」と言って反対意見を述べたりしてたくさん子どもたちが意見を交わすうちに、徐々に学習が深まっています。

<トンボを逃がしたくない>

- ・かわいいから
- ・かっこいいから
- ・いえにもってかえりたい
- ・にがすとさみしい
- ・えさはあげる
- ・鳥にたべられてしまう
-



<トンボを逃がしたい>

- ・かわいそう
- ・一回も飛べないまま死んだらかわいそう
- ・けっこんできないまましんじょう
- ・えさがたべられない
- ・すきなところにかかれなくてかわいそう
- ・ともだちができない
-

「つかまえたいきもちもわかるけど、その子（トンボ）のきもちになったら、いやでしょ？」
「さみしいけど、かわいそうだから、にがしてあげたいきもちになってきた」
.....

反対意見に冷静に耳を傾ける、自分の考えを伝える、全員が発言する…、こうした様子から、トンボの存在が一人一人の児童にとってかけがえのないものになっていることが分かります。話し合いが進むうちに、「みんなでさよならしよう」という方向にまとまり、逃がしてあげることになりました。

「トンボの気持ちになって考える」
「でも自分はこう考える」
「.....」

こうした子どもたちの今回の経験は、今後クラスで様々な話し合いをする場面で必ず生きてくることと思います。様々な意見を出し合う中で、自分たちで結論を出す経験ができたからです。これからの1年生の成長を楽しみにしています。

